

# 幼児における他者感情および他者の見かけの感情の認知

柴田利男

目次
I. 問題
II. 方法
III. 結果
IV. 考察
参考文献

## I. 問題

### 1. 他者感情認知の発達

他者の感情の経験的側面、すなわち主観的感情経験は、必ずしも表情表出や状況から適切に推測・判断できるとは限らない。感情表出には、あえて本当の気持ちを隠す、経験とは異なる感情を表出するなどの、意図的側面が存在するからである。感情表出、特に表情表出に関しては古くから多くの研究が行われているが、そのほとんどは自然な表出を扱っており、意図的な表出に関する研究は少ない。しかしながら意図的な表出は、感情の経験的側面と表出の側面を区別し、社会的相互作用の中で適切に感情を制御するための、重要な要因である(Saarni, 1997)。本研究の目的は、他者の感情経験の推測、本当の感情経験を隠すための意図的表出の理解、および意図的表出の動機の理解について発達的に検討することである。

自然な感情表出の発達過程に関して、Lewis (2000) は、人は誕生した時から「充足」「興味」「苦痛」の原初的な感情を備えており、そこから乳児は充足を通して生後3ヶ月まで

に「喜び」を表現するようになるとしている。同時に苦痛からは「悲しみ」や「嫌悪」の表出が見られるようになる。生後4～6ヶ月になると欲求不満状態と関連して「怒り」が、少し遅れて「恐れ」が表出されるようになる。その後、さまざまな感情が分化して、3歳頃には、感情表出はほぼ大人と変わらないものになるという。

では他者の感情表出の認知はどのように発達していくと考えられているのだろうか。乳児の感情認知について、Walker-Andrews (1986)が行った実験では、7ヶ月の乳児に対し、怒りの表情と喜びの表情を並べ、それぞれの音声を流すとその音声の感情に合わせた表情のほうに注意が向くという傾向が示されている。つまり生後7ヶ月頃になると、視覚的にも聴覚的にも基本的な感情を見分ける能力が確立しつつあると言えるだろう。Borke (1971)は幼児を対象に、物語の主人公の表情について適切な反応ができるかどうかを調べた。その結果、「楽しさ」については3歳児で70%が、4歳児になると約90%が、表情から感情経験を適切に判断できた。「悲しみ」では物語によって差は出ているものの、4歳児で約半数が、6歳児では80%以上の幼児が適切な判断を示した。感情の種類に関しては、他者の否定的な感情より肯定的な感情を正確に判断できるとする報告が多い。この点について、櫻庭・今泉 (2001) は、共感しやすい感情ほど認知しやすいと述べている。

他者の感情経験を推測するということは、他者の内的な心的世界を推測することであ

り、そのためには、他者の視点に立って推論する能力が求められる。つまり、自己の心理状態と他者の心理状態の区別が出来なければならぬ。

Hongrefe & Wimmer (1986) によると、3歳児は自分の視点と提示された物語の主人公の視点の区別はできないが、4・5歳児になると主人公の視点に立った回答が可能である。つまり4歳を過ぎると、他者の視点に立って、その他者の感情を推測すること、すなわち一次的な他者感情認知が可能である。一方、他者の視点からそれ以外の他者の心理状態を推測する二次的な他者感情認知は6歳ごろから可能であるとされている。

これに対し澤田(1997)は、4歳の後半になると二次的な心理状態の認知が可能になり、他者の誤った信念も認知可能になると報告している。澤田(1997)の研究において、4歳児の後半という早い段階で二次的な他者感情認知が可能になった理由として次の2点が考えられる。1つは、一次的な他者の感情認知について質問する際、感情語を用いて尋ねていることである。一般に幼児にとって、表情認知より感情語の認知の方が容易である。このことから、感情語を使用した結果、認知が促されたのだと推測できる。2つ目は“普通”という感情語を使用していることである。“普通の気持ち”は特に何も感じていない状態を指しているが、幼児にとって“嬉しい”や“悲しい”と比べると認知することが難しく、実質的に二者択一的な質問となったために正答率が上がったと推測できる。

本研究では、この2点を考慮に入れて、幼児の一次のおよび二次的な他者感情認知の発達の変化について検討することを第1の目的とする。具体的には、質問において感情語は使用せず表情図から選択させる。そして選択後に言語反応を求めることにする。また表情図には「怒り」を追加し、幼児の選択肢を広げることとする。

## 2. 感情制御の発達

感情は常に感じたままに表出されるわけではない。他者を傷つけないために、また自身自身の気持ちや立場を守るために、感情の制御や調整は必要なことであると多くの人は理解している。

柏木(1988)によれば、自己を抑制する行動は年齢が上がるに伴いほぼ直線的に強まる。そして日本においては、自制や他との協調、集団やルールへの同調が重視される傾向があるので、それが幼児の自己抑制の発達に影響しているとも指摘している。

こうした感情を制御・調整する過程は“感情表出のルール”によって理解される。感情表出のルールは社会的に望ましいとされる感情を表出するという社会での暗黙の約束、つまり社会的規範である。この感情表出のルールを学習していくことにより、感情を制御・調整できるようになる。Saarni(1979)やCole(1986)が実施した“期待はずれのプレゼント”課題は、感情制御に関する代表的な研究例である。この研究ではまず、幼児にある作業をしてもらったお礼として幼児がすでに持っている、あるいは幼児が欲しいとは思っていないプレゼントを贈る。その結果、プレゼントした実験者がいない場合、それを開けた幼児はあからさまに不快の表情を示す。しかし、実験者がその場にいる場合は3歳児でも不快の表情を隠して照れ笑いし、6歳児では『ありがとう』と言い笑顔を浮かべたと報告している。これらの研究は、3歳児でも自分の感情を制御することが可能であることを明らかにしている。

## 3. 他者の感情制御および感情表出動機の認知

幼児が他者の感情の原因をどのように解釈しているか、すなわち幼児における他者の感情表出動機の認知に関する研究によれば、年少の幼児は他者の表情を手がかりとして解釈

する傾向がある (Gnepp, 1983)。そして年齢が高くなるに従い、状況の手がかりが増え、さらに年長になれば内的手がかりが利用されるようになる (朝生, 1987; Fabes, Eisenberg, Nyman & Michealieu, 1991; Harris, Olthof & Meerum Terwoegt, 1981, など)。また塚本 (1997) によれば、5歳児では、感情表出動機に関して回答できない者が多く、5歳児はまだ感情表出には何らかの動機があるということ自体をはっきりと認識できないと述べている。

これらの研究は、制御・調整されていない自然な感情表出を対象にしたものである。それでは自己および他者が感情表出を制御すること、また感情制御の動機について、幼児は理解できるのであろうか。

自己の感情制御について、先に述べた Saarni (1979) や Cole (1986) の研究において、照れ笑いを浮かべた3・4歳児は、それにより相手が騙されてしまうことを認知していないということが報告されている。このことから3・4歳児は、感情表出のルールに従って感情を制御してはいるが、それは意図的なものではないと推測できる。塚本 (1997) や澤田 (1997) によれば、3・4歳児は、感情表出を制御することはできても、その動機や他者に与える影響についての認知はできず、認知されるようになるのは6歳以上になってからである。

他者の感情制御について、Harris, Donnelly, Guz & Pitt-Watson (1986) は、他者は本当に感じている感情とは異なる感情を表出することがあるということを理解し認知できるのは、6歳以上であると報告している。澤田 (1997) の研究においても、他者が見かけの感情を表出することを認知できたのは、4歳児前半で約10%、4歳児後半で約30%、6歳児で約50%であった。それは、4歳児は6歳児に比べて感情制御および感情表出のルールに関する知識が少なく、制御する必要性を認知

できていないためだと述べている。そして、幼稚園などで他者との関わる時間が増えるにつれ、他者が感情表出を制御することを認知していくのだと示唆している。

他者が感情表出を制御し、見かけの感情を表出している時、それを認知できない幼児にとって、他者の感情表出は矛盾した状況である。このような矛盾した状況を幼児に示し、登場人物の感情を同定させたり、なぜこのような表情を表出しているのかと理由を求めたりするのが矛盾解消課題である。これによって、幼児における他者の感情制御および感情表出動機の認知の発達過程について検討することができる。

矛盾解消課題を用いた研究によれば、4歳児や5歳児では課題そのものを理解できない者と、表情を手がかりとする者が多く、6歳児では状況を手がかりとした理由を述べる者が増加する (岩田・田村, 1988; 笹屋, 1997; 澤田, 2000)。これらの研究から、見かけの感情が表出されていることを認知できない幼児は、主に表情や状況などの外的な要因から表出動機を認知しようとしていることがわかる。その外的な要因の中でも早い時期から使用されるのは表情である。このような発達過程は、先に述べた、一般的な他者の感情表出動機の認知の発達と同じである。

本研究の第2の目的は、感情を制御した他者が見かけの感情表出に対する、幼児の動機の認知傾向および発達過程について、先行研究の知見を確認することである。また同時に、他者が見かけの感情を表出していることを認知していない幼児について、何を動機としてその場面を理解するのか、その動機の種類とその発達差についても検討し、これを第3の目的とする。

## II. 方 法

### 1. 被験児

札幌市内のK幼稚園に通う年長組（5-6歳児）の男児13名，女児17名，および年中組（4-5歳児）の男児16名，女児14名の合計60名を対象として，感情認知と感情表出動機に関する面接調査を行なった。調査は2003年の8月下旬から9月中旬にかけて行われた。

### 2. 面接調査

**刺激材料** 「喜び」「悲しみ」「怒り」「無表情」の4つの顔が描かれた表情図版を用意した。

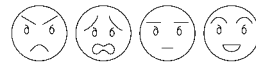
また他者の感情理解を調査するために，オヤツ課題，クジ課題の2つの課題を用意した。この2課題にはそれぞれ喜び，悲しみの2場面がある。喜び場面のオヤツ課題では“主人公が大好きなおやつを貰い，他者が嫌いなおやつを貰う”，クジ課題では“主人公が当たりを引きおもちゃを貰い，他者は外れで何も貰えない”という話である。悲しみ場面のオヤツ課題では“他者が大好きなおやつを貰い，主人公は嫌いなおやつを貰う”，クジ課題では“他者が当たっておもちゃを貰い，主人公は外れで何も貰えない”，という話である。

1課題1場面につき図版は2枚であり，被験児の性別に合わせ，男女別にそれぞれ用意し，合計16枚を作成した。図版の例をTable 1に示す。

表情図版は性別が特定できないように描かれており，1枚のみである。課題図版の1枚目は両者共に表情が描かれていないが，2枚目は主人公だけが喜び場面の場合は悲しい顔，悲しみ場面の場合はうれしい顔が描かれており，他者の表情は描かれていない。なお，全図版とも主人公と他者は並んで描かれており，服装と髪形によって主人公と他者が区別可能である。

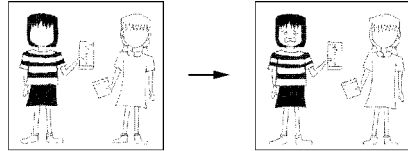
**手続き** 面接はK幼稚園内の1室において

表情図



#### 喜び—オヤツ場面

カオルちゃんとマリコちゃんは，いつも一緒に遊んでいる仲良しのお友達です。ふたりの大好きなお菓子はチョコレートです。

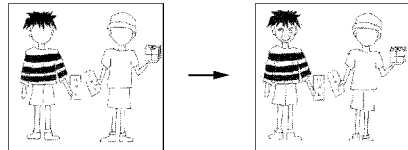


おやつ時間にカオルちゃんは大好きなチョコレートをもらいました。でもマリコちゃんは嫌いなお菓子をもらいました。

（質問2の後）カオルちゃんはマリコちゃんの前で，悲しいお顔をしていました。

#### 悲しみ—クジ場面

ケンタ君とタケシ君は，いつも一緒に遊んでいる仲良しのお友達です。ある日ふたりはクジ引きをすることになりました。アタリを引いたらおもちゃがもらえます。



ケンタ君はハズレを引いたので何ももらえませんでした。でもアタリを引いたタケシ君はおもちゃをもらいました。

（質問2の後）ケンタ君はタケシ君の前で，うれしいお顔をしていました。

Figure. 1 表情図版および課題図版の例

実施され，面接者は心理学専攻の学生3名であった。面接者は最初に子どもの名前を尋ね，十分なラポールをとった。次に，1枚目の課題図版を提示しながら，主人公の紹介を行い，続いて紙芝居風に状況説明文を読み上げた後，表情図版を見せながら，質問1と質問2を尋ねた。質問1は主人公の感情認知質問であり，主人公の表情を選択させた。これは一次的な他者の感情認知の能力について調べるものである。質問2は主人公が認知している他者感情に関する質問であり，他者の表情図を選択させた。これは二次的な他者の感情認知の能力を調べるものである。

回答後，主人公のみ状況とは矛盾する表情が描かれている2枚目の図版を見せ，質問3を尋ねた。質問3は，見かけの感情に対する「感情表出動機」を尋ねるものである。

面接に関する被験児の発言は全て面接者により記録用紙に記入された。質問1と2において，表情図のみを選択し，言語反応の無い

被験児に対しては『これはどんな気持ちかな?』と言語での回答も求め、記録用紙に記録した。また、全質問において『わからない』と発言した被験児に対してはもう一度状況説明と質問を繰り返し、それでも『わからない』という回答であった場合はそのまま記録した。

各課題と各場面を提示する順番は被験児によってランダムとした。

### 3. カテゴリー分類

質問1と2は、選択された表情図をそのままカテゴリーとした。選択された表情図と言語反応が食い違っていた場合は面接者と筆者が協議の上で決定した。なお「悲しみ」を選択し『困っている』という言語反応が多く見られたため、このケースに関しては「困っている」というカテゴリーを新たに作り、そこに分類した。また表情図を何も選択せず『わからない』と回答した場合は「わからない」に分類した。

質問3については、得られた言語反応を整理し6つのカテゴリーを設定した。話の内容を全て無視し、2枚目に描かれている主人公の表情のみを手がかりにして理由を述べた場合を「表情のみ」とした。主人公がなぜ矛盾した表情をしているのかかわからないと述べた場合や、状況が理解できていない場合は「わからない」とした。『貰ったおもちゃが重かった』、『チョコレートが美味しくなかった』な

ど、話の内容を変えずに理由を述べた場合は「つじつま合わせ」とした。『本当は他者の貰った物の方が好きだった』など、話の内容を主人公の表情に合うように作り変えて理由を述べた場合を「内容変更」とした。『さっき貰ったから』など提示された話の順序や流れから理由を付け加えて述べた場合を「付け加え」とした。そして相手の気持ちを考慮し、主人公が偽りの表情を作っていると述べた場合を「他者考慮」とした。

## III. 結 果

分析にあたり面接調査において適切に回答することができなかった年長男児1名、年中男児2名を分析から除外した。また本実験ではオヤツ課題とクジ課題を用意したが、この2課題の回答結果をクロス表にまとめたところ、2課題間において被験児の回答に大きな差が見られなかった。そのため2課題の回答を統合し、1課題を1ケースとみなすことにした。したがって、年中児56ケース、年長児58ケースとして以下の分析を行った。

### 1. 感情認知の発達

一次的な他者感情認知 主人公の感情を問う質問1について、被験児の回答を年齢によってクロス集計し、直接確率計算を行った。結果をTable 1に示す。

喜び場面では、年中児の56ケース中46

Table 1 質問1 (一次的な他者感情認知)×年齢のクロス表

喜び場面						
	喜び	悲しみ	怒り	無表情	困っている	わからない
年中	46	4	2	4	0	0
年長	49	4	0	3	0	2
p = .514						
悲しみ場面						
	喜び	悲しみ	怒り	無表情	困っている	わからない
年中	11	34	7	2	2	0
年長	11	32	10	5	0	0
p = .515						

ケース、年長児の 58 ケース中 49 ケースが、「喜び」を選択している。

悲しみ場面では、年中児で「悲しみ」を選択したのは 34 ケースで、年長児では 32 ケースであった。そして、「怒り」を選択した年中児は 7 ケース、年長児は 10 ケースであった。「無表情」を選択したのは年中児では 2 ケースであったが、年長児では 5 ケースに見られた。また、「困っている」と回答した被験児は年中児 2 ケースであり、年長児には見られなかった。

二次的な他者感情認知 主人公が認知している他者感情を問う質問 2 について、被験児の回答を年齢によってクロス集計し、直接確率計算を行った。結果を Table 2 に示す。

喜び場面では、「悲しみ」を選択したのは年中児 37 ケース、年長児は 39 ケースであった。「怒り」を選択したのは年中児 6 ケース、年長児は 4 ケースであった。「無表情」を選択した被験児が年中児では 1 ケースのみであったの

に対し、年長児では 6 ケース見られた。また「困っている」と回答した被験児が年中児では 5 ケース、年長児では 3 ケースであった。

悲しみ場面では、年中児 41 ケース、年長児 43 ケースが、「喜び」を選択していた。

一次的他者感情認知と二次的他人感情認知の関連性 年齢および場面ごとに、質問 1 × 質問 2 のクロス集計を行ったが、年齢に関わらず、喜び場面では「喜び-悲しみ」、悲しみ場面では「悲しみ-喜び」に回答は集中していた。

## 2. 他者の見かけの感情表出動機の認知

他者の見かけの感情に関する表出動機を尋ねた質問 3 について、被験児の回答を年齢によってクロス集計し、直接確率計算を行った。結果を Table 3 に示す。

喜び場面では、一番多い回答が「わからない」であり、年中児 29 ケース、年長児 26 ケースであった。「表情のみ」が年中児 2 ケースで

Table 2 質問 2 (二次的な他者感情認知) × 年齢のクロス表

喜び場面						
	喜び	悲しみ	怒り	無表情	困っている	わからない
年中	6	37	6	1	5	1
年長	6	39	4	6	3	0
p = .363						
悲しみ場面						
	喜び	悲しみ	怒り	無表情	困っている	わからない
年中	41	9	2	1	1	2
年長	43	10	1	2	2	0
p = .808						

Table 3 質問 3 (感情表出動機の認知) × 年齢のクロス表

喜び場面						
	表情のみ	わからない	つじつま合わせ	内容変更	付け加え	他者考慮
年中	2	29	13	9	1	2
年長	6	26	6	8	4	8
p = .074						
悲しみ場面						
	表情のみ	わからない	つじつま合わせ	内容変更	付け加え	他者考慮
年中	4	27	9	8	4	4
年長	2	27	6	9	13	1
p = .168						

あるのに対し、年長児では6ケース見られた。[つじつま合わせ]は年中児が13ケース、年長児が6ケースと年中児に多く見られた。[付け加え]は年中児では1ケースにしか見られなかったが、年長児では4ケース見られた。

また、[他者考慮]の回答は年中児では2ケースであったが、年長児では8ケースであった。

悲しみ場面でも、一番多い回答は「わからない」であり、年中児・年長児共に27ケースであった。[表情のみ]は年中児では4ケースに見られたが、年長児では2ケースであった。また[つじつま合わせ]は年中児9ケースに対し、年長児は6ケースであった。[付け加え]は年中児では4ケースに見られ、年長児ではそれよりも多く13ケースに見られた。[他者考慮]は年中児では4ケースであったが、年長児では1ケースのみであった。

### 3. 感情認知と感情表出動機の認知の関連性

場面×年齢別に、主人公の感情を問う質問1×他者の見かけの感情に関する表出動機の回答(質問3)の、クロス集計を行った。

喜び場面の質問1に関しては、年齢に関わらず「喜び」—「わからない」という組み合わせが圧倒的に多く、その他は、「喜び」—「つじつま合わせ」、「喜び」—「内容変更」という反応が見られた。また年長児では「喜び」—「付け加え」という反応も若干見られた。質問2に関しても、年齢に関わらず「悲しみ」—「わからない」が圧倒的に多く、その他の反応は質問1の場合と同様であった。

悲しみ場面に関しても、結果は喜び場面とほぼ同様であり、場面に適合した感情認知に対して、「わからない」と回答するものが多く、その他は「つじつま合わせ」、「内容変更」が多く、また年長児では「付け加え」が若干多いという結果であった。

## IV. 考 察

### 1. 幼児の一次的および二次的他人感情認知

本研究では、幼児の一次的及び二次的な他者の感情を認知する能力について、年中児・年長児間で大きな発達差は見られず、4歳の時点で既にその能力を持っているということが明らかになった。

一次的な他者の感情認知の能力について、喜び場面では、主人公の感情は「喜び」だと80%以上の被験児が認知しており、悲しみ場面では「悲しみ」を選択した被験児は65%以上であった。しかし「怒り」や「困っている」も不利益を被っている人が抱くネガティブな感情として十分にあり得る。そこで「悲しみ」と「怒り」、そして「困っている」を合わせたものが一次的他人感情認知の回答として相応しいと考えるなら、悲しみ場面の回答においてネガティブな感情を選択したケースが年中・年長共に70%以上となり、場面に関係なく、他者の感情認知能力を4歳の時点で有していることがわかった。

二次的な他人感情認知についても、場面に関係なく年中・年長児ともに70%以上の被験児が相応しい回答をしており、二次的な他人感情認知の能力も4歳の時点で有していることが明らかとなった。この結果は、澤田(1997)の研究結果と同じであり、感情語・表情図選択に関わらず、4歳以上の幼児は二次的な感情を認知することができると言える。

### 2. 他者の見かけの感情表出動機の認知

他者が見かけの感情を表出している動機を、他者を考慮した感情制御・調整の結果であると認知していたケース、すなわち[他者考慮]の回答は、喜び場面で年中児2ケース・年長児8ケース、悲しみ場面では年中児4ケース・年長児1ケースであり、非常に少ないという結果になった。従って、他者が本当の感情とは違う感情表出をしていることの認

知は、6歳児でも難しいということをも本研究は明らかにしている。

この結果は6歳児の約半数が認知可能としていた澤田(1997)の研究結果とは大きく違うものであったが、その理由として2つ考えられる。一つは澤田(1997)の場合、『本当の気持ちを隠そうと思っています。』と質問時に教示していることである。これは被験児に主人公は感情を隠して違う表情を表出するのだと教えていることになり、見かけの感情の認知について検討しているとは言い難い。幼児はその場面で表情を隠す必要性を感じていなくとも、そのように教示されたことにより、適切な反応が誘導されたと考えられる。また問題で示したとおり、実質的に2者択一形式の設問であるため、回答は容易であったと推測できる。

本研究では『違うお顔をしていました。なぜでしょう?』と、表情が状況と矛盾するという情報のみを提示しており、その行動の動機を推測させている。また選択肢を与えていないため、Harris et al.(1986)や澤田(1997)よりも難易度が高くなっている。また、これらの研究では本当の感情とは違う表情を選択するのかどうかを尋ねており、その行動の動機を認知しているかどうかまではわからない。以上のことから、他者の見かけの感情表出を認知できるようになるには自己の感情表出制御の認知と同じように、2つの段階があると考えられる。1つ目の段階はHarris et al.(1986)や澤田(1997)から推測される、思っていることとは違う表情をする場合があると認知できる段階である。これは幼児期の間認知され始めるものと思われる。そして2つ目は、その行動の背景にある動機も把握できるようになる段階である。この2つ目の段階に相当するケースが本研究では少ないことから、幼児期ではその認知は困難であると考えられる。

次に、少数数ではあるが[他者考慮]と回

答できた者について検討する。[他者考慮]という回答は、喜び場面において10名、悲しみ場面において5名であり、場面による違いが見られた。

喜び場面において、本当の感情を隠すという主人公の行動は、不利益を被った相手への気遣いであり、向社会的な行動だと言える。このような相手を思いやって行動することは、集団行動を学ぶ場である幼稚園では当然奨励されている行動であろうと推測できる。一方、悲しみ場面での行動は、不利益を被った自分のプライドを守るためのものであり、自己防衛的な行動だと言える。この自己防衛的な行動が幼稚園などで奨励されているとは考えにくい。従って、向社会的な行動の認知は幼稚園での集団生活を通して促進されているため、自己防衛的な行動を認知することよりも容易になるものと考えられる。すなわち、本研究の結果は自己保護的な感情表出のルールよりも向社会的な感情表出のルールの方が早く認知されるというGnepp & Hess(1986)の研究結果を支持するものであると言えよう。

### 3. 感情表出動機の認知に用いられる手がかり

本研究では、他者の感情表出動機の認知に関する質問の回答を、6つのカテゴリーに分類した。この中で、[表情のみ]は表情を手がかりとして認知された動機である。[つじつま合わせ]と[付け加え]は、その場の状況を手がかりにして認知された動機だと考えられる。そして[内容変更]は主人公の内的な要因を手がかりとして認知された動機だと考えられる。

本研究の結果では、一次的大および二次的な他者感情認知は可能であっても、動機の認知については[わからない]と回答するケースが多く見られた。先行研究によれば、4・5歳児では矛盾課題の解決は難しいと考えられ



るが、本研究の結果は6歳児においても、矛盾課題の解決はやはり困難であると言える。また先行研究によれば、動機を認知するための手がかりは、表情から状況へ発達していくと考えられる。しかし本研究では[表情のみ]のケースはあまり見られなかった。手がかりとして表情を用いる時期は、ごく短期間に限られるのかもしれない。

場面の状況を手がかりとして用いる [つじつま合わせ] と [付け加え] が、本研究では多く見られた。この二つの手がかりを比較すると、[つじつま合わせ]は年中児に多く、[付け加え]は年長児に多く見られている。[つじつま合わせ]は1課題中の情報のみを手がかりとして動機を述べているが、[付け加え]は2課題以上の情報をもとに新たな情報を作りだし、それを手がかりに動機として用いている。つまり [付け加え] が個別事例に基づく状況の手がかりであるのに対し、[つじつま合わせ]は文脈的な手がかりということができ、認知的により高度な能力を必要とすると考えられる。よって、この二つは同じ様に状況を手がかりとしてはいるが、その背景にある動機の認知の発達過程として、個別事例から文脈へという順序があることを示唆している。

#### 4. まとめ

本研究では、幼児の他者感情認知と、他者が表出している見かけの感情の認知について検討した。

先行研究では、一次的な他者感情認知は4歳から、二次的な他者感情認知は4歳後半から可能になるとされているが、本研究の結果では、一次のおよび二次的な他者感情認知はともに4歳の時点で既に可能であることが明らかとなった。よって、これらが認知可能となる年齢は3歳以下だと思われる。

他者の存在を考慮した上で、見かけの感情表出を他者が行うことがあるということを認知できたケースに、発達の差は見られな

かった。また認知できたケース自体が少なく、幼児期での認知は難しいということが明らかになった。見かけの感情の認知には、他者が本当とは違う見かけの感情を表出することがあることを認知できる段階と、それが他者の存在を考慮した上での行動だとその動機まで認知できる段階の2段階があると想定できる。幼児期の子どもは、ほとんどが第1の段階にあり、第2段階に到達している者はごく少数であった。ただし見かけの感情の表出が、向社会的なものである場合は、自己防衛的なものである場合より認知されやすい傾向があった。

感情表出動機の認知に用いられる状況の手がかりについては、個別事例から文脈へという発達の順序があることが示唆された。

#### [引用文献]

- 朝生あけみ 1987 幼児期における他者感情の推測能力の発達——利用情報の変化—— 教育心理学研究, 35, 33-40.
- Borke, H. 1971 Interpersonal perception of young children: Egocentrism or empathy?. *Developmental Psychology*, 5(2), 263-269.
- Cole, P.M. 1986 Children's spontaneous control of facial expression. *Child Development*, 57, 1309-1321.
- Fabes, R.A., Eisenberg, N., Nyman, M. & Micalieue, Q. 1991 Young children's appraisals of others' spontaneous emotional reactions. *Developmental Psychology*, 27, 858-866.
- Gnepp, J. 1983 Children's social sensitivity: Inferring emotions from conflicting cues. *Developmental Psychology*, 19, 805-814.
- Gnepp, J., & Hess, D.L.R. 1986 Children's understanding of verbal and facial display rules. *Developmental Psychology*, 22, 102-108.
- Harris, P.L., Donnelly, K., Guz, G.R. & Pitt-Watson, R. 1986 Children's understanding of the distinction between real and apparent emotion. *Child Development*, 57, 895-909.
- Harris, P.L. Olthof, T. & Meerum Terwoegt, M. 1981 Children's Knowledge of Emotion.

- Journal of child Psychology and Psychiatry*, 22, 247-261.
- Hongrefe, G.J. & Wimmer, H. 1986 Ignorance versus false belief: A developmental lag in attribution of epistemic states. *Child Development*, 57, 567-582.
- 岩田純一・田村清美 1988 矛盾解消のためのエピソード生成に及ぼすモデルの効果 金沢大学教育学部紀要 (教育科学編), 37, 99-104.
- 柏木恵子 1988 幼児期における「自己」の発達 東京大学出版会
- 樟本千里・近藤慈恵・林千津子・原野明子・八島美菜子 2001 児童の感情表出の制御に関する知識——他者に合わせて感情を表出する場合—— 広島大学大学院教育学研究科紀要, 第三部, 50, 461-467.
- Lewis, M. 2000 The Emergence of Human Emotions. In M. Lewis & J.M. Haviland-Jones (Eds.), *Handbook of Emotions*. Second edition. New York: The Guilford Press., 265-280.
- Saarni, C. 1979 Children's understanding of display rules for expressive behavior. *Developmental Psychology*, 15, 424-429.
- 櫻庭京子・今泉敏 2001 2～4歳児における情動語の理解力と表情認知能力の発達の比較 発達心理学研究, 12, 36-45.
- 笹屋里絵 1997 表情および状況手掛りからの他者感情推測 教育心理学研究, 45, 312-319.
- 澤田忠幸 1997 幼児期における他者の見かけの感情の理解の発達 教育心理学研究, 45, 416-425.
- 澤田忠幸 2000 幼児期における表情手がかりと状況手がかりを統合するエピソード構成 心理学研究, 71, 331-337.
- 塚本伸一 1997 子どもの自己感情とその自己統制の認知に関する発達の研究 心理学研究, 68, 111-119.
- Walker-Andrews, A.S. 1986 Intermodel perception of expressive behaviors: Relation of eye and voice?. *Developmental Psychology*, 22, 373-377.

本研究の一部は、日本発達心理学会第16回大会において報告されました。

本研究の実施にあたり、北星学園大学2002年度卒業生 高村朋美さんの協力を得ました。ここに記して謝意を表します。また調査にご協力いただいた、大藤学園 北野しらかば幼稚園の大谷和彦園長先生、担当の先生方、園児の皆さんに心より感謝申し上げます。

[Abstract]

## Preschooler's Appraisals of Other's Emotion and Emotional Dissemblance toward the Other Person

Toshio SHIBATA

This study examined preschooler's appraisal of other's emotion and emotional dissemblance toward the other person. Sixty children listened to stories in which protagonist would feel a positive (or negative) emotion and the other person feel a negative (or positive) emotion, and the protagonist would hide his(her) emotion toward the other person. Children were asked 3 questions: how would the protagonist really feel, how would the protagonist appraise the other person's emotion, and why the protagonist hid his(her) own emotion toward the other person. The results indicated that even 4-year-olds recognized adequately the protagonist's emotion and his(her) appraisal of the other's emotion, and that even 6-year-olds could not understand the reason why the protagonist hid his(her) own emotion toward the other person. These findings are discussed in relation to recent research concerning children's socio-emotional development.